

〔特別寄稿〕

学芸員を志望する学生諸君へ

大和文華館元理事 成瀬不二雄

はじめに個人的な話で恐縮ですが、私は昭和36年4月に大和文華館学芸部に入れて頂いてから、これまで40年近く、当館にて学芸関係の仕事に従事して参りました。ところが、この4月から、ある大学院に日本美術史の教授としてお招きいただくことになりましたので、このたび当館を退くことになりました。私の長い学芸員生活をふりかえって、自分が果たしてどれだけ大和文華館のお役に立てたのかと考えると、気恥かしさで顔が赤くなります。しかし、館職員としての長い生活のうちに、私は私なりに美術館の学芸員という職業についていろいろ考えることがありましたので、ここではそれについてお話ししようと思います。

私が学生だった頃、ほとんどの大学には学芸員養成を目的とした博物館学の講義などはまだありませんでした。ところが、昭和29年だったと記憶しますが、関西のある国立大学で、一定期間にわたって博物館学芸員の資格を取得するための講習会が開かれましたので、私もそれを受講しました。その講習会の講師となったのは大い大学の先生や先輩の博物館・美術館の館員たちでしたが、講習会のあいだ、私たちはそのような人びとから、しばしば次のようなことを言われたものです。

「欧米では博物館の学芸員という、大学の教授と同じ位、いやそれ以上に社会で尊敬されている。だから諸君はそのついでに勉強しなければならぬ」と。

今日では、学芸員という職業についてあらたまった説明は不要かもしれません。しかし、その頃ではそのような説明をして学芸員希望者を勇気づけねばならないほど、学芸員の地位が低かった——というよりも、それがどんな職業なのか世間では皆目わからなかった——のです。たとえば、その頃よく「学芸員は学校の学芸会の世話を焼くのが仕事ですか?」と聞かれました。また、私が若い美術館員だった頃、ある人から「うちの息子は体が弱くて、会社勤めは無理なので、学芸員などにはなれませんか?」と尋ねられたことがあります。その頃、学芸員というものは展覧会の企画、集荷、展示作業のために、強い体力が必要だと、私は身にしみて感じ始めていましたので、それは「体が強い」の間違いではないですかと、答えなくなったものです。ちなみに、博物館の学芸員——特に公立美術館のそれ——は、日常の数多くの仕事に振り廻されていますので、彼らから「俺たちは学芸員ではなく、雑芸員だ」とよく愚痴を聞かされました。

今日では多くの大学で学芸員を養成するための博物館学の講座が設けられていますし、全国的に増加した美術館や博物館で働く人がいますので、学芸員という職業も次第に理解されるようになってきました。しかし、それだけに従来では考えられなかったような問題も起ってきています。すなわち、今日では美術館や博物館の館員を新規採用する場合、その応募者が

大学で学芸員の資格を取得したかどうかということが、最低条件となります。これについて、国立や私立の施設の場合は、資格の有無ということに必ずしもこだわらないようですが、お役人が運営の主体となっている公立の美術館の場合、学芸員の資格を持っているか否かということが、専門家——少なくともその予備軍——の条件だと考えられているようです。

しかし、大学での博物館学の講義は、当然のことながら、最大公約数的な知識を教えるものにすぎません。それはどのような博物館や美術館に勤めてもすぐに役立つようなことは、もちろん教えてくれないのです。ちなみに、大和文華館ではこれまで大学の博物館実習の講義を、館として受け入れてきませんでした。しかし、一般の団体入館者に展覧会の解説をするときのように、大学で博物館学を受講している学生に、大和文華館の概要を説明することはありました。そのようなとき、講壇に立って説明した私は、学生さんたちから、「この美術館では収蔵庫と展示室の温湿度をどの程度に保っていますか?」とか「照明は何ルクスに抑えていますか?」とかの質問を受けたものです。おそらく、その学生さんたちは美術館員に実際に会って、温湿度や照明についてのレポートを出すように先生から命ぜられていたのでしょう。

ところが、常識で考えても、陶磁器を主体とする美術館と絵画を中心とする館とでは、温湿度や照明についての条件は全く違うのです。これは古美術と近・現代美術の保存法の違いについても言えることです。さらに、所蔵資料の分類、展示などの方法、また資料の取扱い方についても、いろいろの場合が考えられましよう。

そこで、大学での博物館学の講義は千差万別の美術館や博物館での仕事について、ごく一般的なことを教えるのにすぎません。その講義がかゆいところに手が届くよ

うに教えてくれないからといって、それは決して担当の先生の責任ではないでしょう。美術館や博物館の学芸員というものは、他の多くの職業の場合と同様に、そこに就職してから、その館の職員として有能であるように、一から仕事を覚えてゆくもので、学芸員資格を取ったからと言って、それで決して専門家になったわけではないのです。これは学芸員を志望する若い学生さんにはよくわかっていることでは、館員を採用する当事者には余りわかっていないことかもしれません。

もちろん、公立の美術館や博物館の場合、その館に採用されるためには、学芸員資格を取得しておかねばなりません。また、私とても大学で博物館学の講義を受けても意味がないとまでは申しません。ただ、私が若い学生さんに希望したいのは、そればかりでなく、むしろ自分の専攻する分野をしっかり勉強してきてほしいということです。また、何か一つの外国語に堪能なこともよいでしょうし、日本や東洋の古美術を所蔵し、展示する美術館の場合には、漢文や日本の古典を勉強してきたことが、役に立つ場合が多いのです。

とにかく、老美術館員としての私が若い学生諸君に申したいことは、博物館学の講義を受けて学芸員の資格を取ることもちろん必要ですが、自分の大学での専攻や外国語をしっかり勉強してきてほしいということです。そして、学芸員としての仕事や専門についての勉強は、幸いに就職することができてから始まるのです。

とにかく、私は大和文華館のように所蔵品が充実し、研究図書が充実した美術館において働いてきたことに大きな喜びを抱いています。しかし、一部の大学の先生から、「美術館員はいい、実物資料が見られるから」と言われると、「美術館の多忙さを知らないで何を言うか」と叫びたくなることもありましたが。

季刊 美のたより No.128

平成11年 8月19日

発行 大和文華館